

英国ロイヤル・オペラ

2024 年日本公演



『リゴレット』より



『トゥーランドット』より

【演目】

『リゴレット』 G.ヴェルディ作曲

指揮：アントニオ・パッパーノ

演出：オリヴァー・ミアーズ

□公演日時・会場

2024年 6月22日(土) 15:00 会場：神奈川県民ホール

6月28日(金) 18:30、30日(日) 15:00 会場：NHKホール

『トゥーランドット』 G.プッチーニ作曲

指揮：アントニオ・パッパーノ

演出：アンドレイ・セルバン

□公演日時・会場

2024年 6月23日(日)、29日(土)、7月2日(火) 15:00開演、26日(水) 18:30開演

会場：東京文化会館

【入場料金(税込)】

S席 72,000円 / A席 62,000円 / B席 48,000円 / C席 38,000円 / D席 32,000円

E席 22,000円 (全席指定)

【ご優待価格】(S～C席 1,000円割引)

S席 71,000円 A席 61,000円 B席 47,000円 C席 37,000円

【予定される主な配役・出演】

『リゴレット』

リゴレット：エティエンヌ・デュピュイ

ジルダ：ネイディーン・シエラ

マントヴァ公爵：ハヴィエル・カマレナ

『トゥーランドット』

トゥーランドット：ソンドラ・ラドヴァノフスキー

カラフ：ブライアン・ジェイド

リュウ：マサバネ・セシリア・ラングワナシャ

音楽監督：アントニオ・パッパーノ

ロイヤル・オペラ合唱団

ロイヤル・オペラハウス管弦楽団

※表記の演目、出演者は2023年11月10日現在の予定です。今後、出演団体の事情等により変更になる場合がございます。あらかじめご了承ください。

※未就学児童入場不可

主催：公益財団法人日本舞台芸術振興会／日本経済新聞社

【広告文言】

(キャッチ1)

音楽監督パッパーノが足掛け23年かけて築き上げてきた成果の集大成！

(キャッチ2)

〈パッパーノ+ロイヤル・オペラ〉の華麗なるフィナーレ

(キャッチ3)

〈パッパーノ+ロイヤル・オペラ〉黄金時代の掉尾を飾る極め付き2本

英国ロイヤル・オペラは、ウィーン国立歌劇場、ミラノ・スカラ座、パリ・オペラ座、メトロポリタン歌劇場と並び世界の五大歌劇場と称されています。その中でも一番勢いがあるのがロイヤル・オペラです。その歴史でみれば、1732年にコヴェント・ガーデンに最初の劇場が建てられたロイヤル・オペラはウィーンに次いで2番目に長い歴史をもっています。この長い歴史において、アントニオ・パッパーノの音楽監督在任期間は歴代最長。これほど長きにわたって一つの歌劇場で音楽監督を務めた指揮者はほかにいないでしょう。何ととってもオペラは指揮者です。2002年の就任以来、“劇場育ち”

のバッパーノはさまざまなレパートリーに挑み、この劇場のポテンシャルを高めてきました。バッパーノの強いリーダーシップによって、ロイヤル・オペラに華々しい躍進と栄光がもたらされたのです。

今回、芸術監督としての掉尾を飾るべくバッパーノが日本公演に選んだのが、2017年よりオペラ・ディレクターを務めるオリヴァー・ミアーズ演出の「リゴレット」。バッパーノが築いてきた成果がここに結実しています。そしてもう一本はロイヤル・オペラが誇る人気プロダクション「トゥーランドット」。〈バッパーノ＋ロイヤル・オペラ〉の集大成を示す総力をあげた舞台を、日本のオペラ・ファンは居ながらにして目の当たりにすることができるのです。

(リゴレット キャッチ)

驚くほど美しく、スリリングに聴かせるバッパーノ絶対の自信作！

音楽監督のバッパーノが最後の日本公演で日本の観客に披露したいと固執したのが、この『リゴレット』。バッパーノの絶対の自信作ですから、感動の記憶として生涯残るはずです。

ヴェルディが16作目の題材に取り上げたのはヴィクトル・ユゴーの戯曲〈王はお愉しみ〉。人間的苦悩と父性愛の悲劇に惹かれたヴェルディは、自身が目指す「ドラマと音楽の合一」のために新しい表現方法に踏み出し、成功させました。リゴレット、その娘ジルダ、マントヴァ公爵といった登場人物は、それぞれが複雑な心情の持ち主。善悪含めたその心の動きが、ドラマのなかで否応なく迫ってくるのはヴェルディの音楽の力というべきものです。

コロナ禍による18カ月の劇場閉鎖の後、2021/22シーズン・オープニングにロイヤル・オペラを満員にしたのは、この『リゴレット』でした。バッパーノによる音楽づくりは「官能的で恐ろしいほどの美しさ！」「並はずれた才能を発揮したその音楽はスリリング」と大絶賛され、マントヴァ公爵が“美術と女性の蒐集家”であったことをドラマの根底に織り込んだオリヴァー・ミアーズによる新演出は、奇を衒うことなく、長く人々を魅了する絵画や彫刻と同じような「流行に終わることのない芸術的な作品」と評価されました。

日本公演には、バッパーノ指揮はもちろん、タイトル・ロールにはその才能とテクニックにバッパーノが太鼓判を押すエティエンヌ・デュビュイ、ジルダ役にはこの役で世界的に活躍しているネイディーン・シエラが登場。マントヴァ公爵役がイタリア・デビューだった“驚異のテノール”ハビエル・カマレナによる「女心の歌」もけっして聴き逃せません。

(トゥーランドット キャッチ)

時代とともに進化してきたロイヤル・オペラの十八番！

プッチーニの最後の作品『トゥーランドット』は、ヴェルディの『アイダ』と同様に、音楽性に加えて、スペクタクル性やエンターテインメント性を備えた作品として人気を集めています。このアンドレイ・セルバン演出の『トゥーランドット』は、1984年に初演、1986年の日本公演でも上演され大成功を収めました。階段状の回廊、豪華な玉座に座った皇帝、豊かなイマジネーションをあらゆる陰影に富んだ照明などなど、美しく壮麗な舞台装置が人々を魅了しました。

英国ロイヤル・オペラで愛され続けて40年、この間には演出が何度かバージョンアップされています。当初からの細部に至るまでのこだわり、さらに、新鮮さや鮮やかさをもたらす色彩、さらにスピーディになりインパクトが強くなった振付など。印象的な変更は、オペラの開演前にカーテンが上がっており、深紅の吹き流しが滝のように下がっていることかもしれません。バッパーノが『トゥーランドット』をオーケストラ・ピットで振ったのは2023年春が初めてというのは意外ですが、その時にも「どの指揮者よりも優れている」と絶賛されました。

日本公演では、パワフルな声がトゥーランドット姫にぴったりのソンドラ・ラドヴァノフスキー、世界で最も有名なアリア「誰も寝てはならぬ」を聴かせるのはカラフ役で世界を席卷しているブライアン・ジェイド、そして現地ではすでに“リユー役の絶対的実力者”と認められているマサバネ・セシリア・ラングワナシャの登場も楽しみです。38年ぶりの日本

再演の成功は約束されています。